

# 「今日における宣教の課題 ―とくに教会幼稚園をめぐる―」

久世そらち 1994

## 1 はじめに

日本基督教団の教会で、特定の幼稚園との関係をもつ教会は少ない。ことに北海教区においては、教会数に比べ教会関係幼稚園の数が非常に多いといえる。私が牧会のつとめを負う旭川豊岡教会にもまた関係幼稚園としてひまわり幼稚園があり、歴代の教会の牧師が園長の職務をも担ってきた。

このことにとどまらず、日本においては教会と幼稚園の関係は深いものがある。それでは、教会にとって、幼稚園を設置する、あるいは幼稚園と関係するということは、どういう意味をもつのか、いいかえれば、教会の使命との関わりにおいて、幼稚園はどのように位置づけられるのであろうか。

現実の教会と幼稚園の関係のありかたは、決して一様ではない。法的には宗教学法人立の幼稚園・学校法人立の幼稚園などの別があり、また運営の実態からしても、教会員または牧師が理事長・園長として責任を負う場合や、その他の場合などがある。また、各々の幼稚園の設立の目的やその後の教会との関係の結び方も、個々の幼稚園によって異なるものがある。しかし、一応ここでは、こうした差異を含むことを充分認識したうえで、教会と関係する幼稚園について、教会幼稚園ということばを用いることとする。これは、創立がキリスト教精神によるということよりも、現在、特定の各個教会との活きた関係を保持しているという点を強調した呼び方である。

いま、現に多くの教会幼稚園が存在し、日々保育を行っているのであるが、教会幼稚園のありかたもしくは位置づけについて、神学的なまとまった論考はそう多くはない。いわゆるキリスト教教育一般については、比較的多くの研究業績もみられるのであるが、それらはほとんどが教会学校教育か、あるいは中・高等教育を主とする学校教育を念頭においたものであり、教会幼稚園についての関心はむしろ付属的なものにすぎないように思われる。

かつて、日本基督教団全国教会幼稚園連絡会が、文部省による幼稚園の学校法人化の推進を背景として、「キリスト教幼児教育および施設についての基本的見解」略称「ステートメント」を発表し（1977年）、またその解説を含む論文を収録した「新キリスト教幼児教育の原理J」を出版した（1979年）。それ以後、少なくとも日本基督教団の教会幼稚園に関しては、これに匹敵するような研究はなされていないといつてよい。

今日の教会の宣教の課題としての教会幼稚園の存在は、けっして小さいものではない。それに比して、教会幼稚園への、教会の側からの宣教的関心は、不当に低いものといわざるを得ないのが現状である。

以上のような問題認識を踏まえ、本稿においては、教会幼稚園の宣教論的な位置づけを試みるものである。

## 2 教会のわざとしての幼児教育

### キリスト教保育指針から

キリスト教保育連盟は、1989年に「キリスト教保育指針」を発表した。その中で、キリスト教保育（幼稚園・保育所の双方を含む）と教会の関係については次のように述べられている。

「現在、キリスト教保育に求められていることは教会のための伝道という理解を越え、キリスト教信仰に基づいて、子供の現在を豊かにし、子供の成育と社会、および文化の形成に寄与し得る保育を行うことである。このことは、保育の精神的基盤を教会からくみとることを意味している。…教会は園を通して保育に関わる問題を聞き、そのことを通して子どもと保育に教会が仕える道を求めていくことが可能となる。園はその意味で、教会が現代社会の状況のもとで、その信仰の課題とすべき事柄を教会に提供することにもなる。」

ここでは、包括的なことがいわれているのであり、その限りでは正しい方向性を示していると思われる。しかし、ではキリスト教保育が教会からくみとるべき「精神的基盤」とは何か、あるいは園が教会に提供していく「信仰の課題とすべき事柄」とは具体的にどのようなことであるのか、といったことについては、充分には述べられていない。もちろん、これは「保育指針」としての文書の性格からくるものでもあって、むしろその空白を埋めていくことは、教会の側に求められるべき作業というべきかもしれない。

### 「ステートメント」から

キリスト教保育連盟は超教派的組織でもあり、それゆえにまた種々の制約を免れないとも考えられるのであるが、前述のように、日本務督教団においては、全国教会幼稚園連絡会が、学法化の推進を背景にプロジェクト・チームを設置して研究をすすめ、1977年に、その成果が「キリスト教幼児教育および施設についての基本的見解（以下「ステートメント」と略称）」として発表された。

ステートメントは、序の他に12項目からなる。12項目のうち最初の3項目が「教会の宣教的使命」という見出しのもとにまとめられ、教会幼稚園のありかたの基礎とすべき神学的見解が表明されている。

第1項においては、「福音宣教は、単に宗教的教義をことばで伝達したり、そのことを通して信徒数の増大をはかったりするだけのことではない。むしろ、すべてのものを新たにされるキリストのみこころに従って、すべての人間に、その失われた人間性や創造性を回復するよう呼びかけるわざである。」と述べられている。ここでは、「宗教的教義をことばで伝達」すること、「信徒数の増大をはかったりする」ことを、教会の宣教の本質としてとらえることに批判的な姿勢がうかがえるのであり、それにかわって、より根源的な福音宣教の本質として、「すべての人間に、その失われた人間性や創造性を回復するようよびかける」ことが示されている。

この第1項の宣教理解をうけて、第2項では、幼児教育を、教会の福音宣教のわざの一環に位置付ける。「教会の宣教的使命は、キリストを通して働きかけられる神のみわざに、積極的に参与することによって遂行される。その奉仕の具体的なあり方は、人間生活の全般に関わっているために多様である。…私たちが従事している幼児教育のわざも、こうした教会の多様な奉仕のわざの一つなのである。」

第3項では、第1項に述べられた宣教理解を、具体的に幼児教育のありかたに則して示している。ここでは、幼児教育施設の過去のありかたをふりかえって、「ふるくは、幼児に神を知らせ、福音に接する機会をあたえ、できれば、彼らが信仰を継承するようにとのねがいから創設されるものが多かった。また幼児とのかかわりを手がかりとして地域住民への接触をはかり、地域伝道あるいは地域への奉仕に役立てようとする場合もあった。あるいは経済的理由から、伝道の補助手段として施設を創設した場合も少なくない。」と、やや批判的に概観している。

しかし、このステートメントにおいては、教会のわざとしての幼児教育施設（幼稚園と保育所を含む）の位置付けについて、具体的な目的や設立の意義について述べるにいたっていない。第3項において、

「神はこれらの施設を用い、人間的な創設の意図をこえた働きによって幼児を導き、助け育ててこられた。」とあるが、人間の意図をこえた神の働きが、どのように独自のやりかたで、幼児を導き、助け育ててこられたのか、具体的な言及はなされていない。前述のように、この第3項では、過去のありかたについては、具体的な反省がなされているのであるが、それを踏まえたうえでの、今日的、あるいは将来的な幼児教育の具体的なありかたについては、いまだ不明瞭との印象をまぬがれない。

### 山内論文から

このような「ステートメント」の欠を補うのが、「新キリスト教 幼児教育の原理」に収録された諸論文であり、とくに本稿との関連でいえば、山内一郎による論文「ミッションとしてのキリスト教幼児教育」である。

山内は、『教会のわざ』としての幼児教育の位置づけのためには、そもそも教会とは何か、という問いから出発する新しいミッション論の視点が求められるように思う。」として、ミッションの概念を用いて教会のわざを論じる。

山内は、まず教会をミッションにおいて理解する。「教会が世界に対して果たすべき種々なる機能としてのミッション (The Church has missions) という理解に優先して、むしろ派遣する主体は神ご自身であるゆえに、その創造的な働きに参与する教会の存在の仕方それ自体がミッションである (The Church is mission) と言われる (フェツェドム) ようなミッションの本質的、存在的な構造把握が肝要となる」のである。そして、その上で「ミッションとしての教会の姿・あり様を活動・機能の面から捉えると、その内容は言の受肉の出来事、すなわち積極的な意味における福音の世俗化のプロセスに参加していく行為」とするのである。

もちろん、このようなミッションとしての教会のわざは、キリストとしてのイエスから離れては成立不可能であり、いっさいは無益である。そのイエスのミッション活動は、マタイ福音書4章23節および9章35節には、「教え」と「いやし」として要約されている。

山内は、ここでミッションとしての「いやし」に注目する。イエスの「いやし」は、「たんに人間の病やあらゆる窮状からの一時的、相対的な治癒ではなく、むしろ『死に至る病』といわれるような人間にとってどうにもならぬ限界・不自由からの究極的、絶対的な解放、まさに「救い」のほかではなかった」のであり、逆に「救い」とは、「けっして『身体』を離れた『靈魂』のみをみざすものではなく、むしろ心身の両面、いわば全体人間そのものにむけられ、その健全な『いやし』と不可分の事柄である」と理解される。

したがって、「いやし」のミッションは、「単に生理的、医学的な狭義の治癒概念をこえて、むしろ全体人間の健全な働きと成長に密接に関わり、したがって神学的には、創造論と結合した教育の根本的課題につながる必然性」があるとする。このことを、幼児教育に則して考えるならば、「無邪気に笑い泣きする幼な子そのものも、やはりひとたび疑問化され、かついやし=救いの対象とされなくてはならない。教会はそのために、『教育』という『奉仕』の手段に訴え、神ご自身の『いやし』のわざに参与すべく招かれている」とすることができる。山内はこのようにして、キリスト教幼児教育の目的を「幼な子らが豊かに成長し、やがて神の創造的なミッションにみずからよろこんで参加するように彼らを助け、促し、導くことである。」とするのである。

山内の見解は、いかえれば「ステートメント」の第1項で、教会の宣教は「すべての人間に、その失

われた人間性や創造性を回復するようよびかける」ものであるとしているのに呼応して、それを幼児教育の場に則して理解したものであるということができよう。

教会の幼児教育を「いやしのミッション」としてとらえる山内の理解は、今日の教会幼稚園のありかたを考えるうえで、かなり有効であると思われる。以下に、具体的にひまわり幼稚園の事例により、「いやしのミッション」として教会幼稚園をとらえることを試してみたい。

### 3 ひまわり幼稚園の保育

#### 設立の事情

ひまわり幼稚園は、旭川豊岡教会附属幼稚園として1960年に開設された。旭川豊岡教会はもと市内中心部にあったのであるが、旭川市街の郊外への発展にともない1959年に現在地に移転し、それを契機として幼稚園を開設したのであった。

幼稚園の創立の精神については、以下のように記されている。

「教会附属幼稚園としてキリスト教精神にもとづく人格教育を中心とし、幼稚園の各領域を通し幼児の心身の調和的な発達をはかり個々人の実情、生活に則した指導をし、よく聞き、よく発言し、自由に表現し、創作し得る力を引き出すための幼児教育を目標とする。（「幼な児よ天に向かってはばたけ」194頁）」

また、当時旭川豊岡教会牧師としてひまわり幼稚園の園長の実務にあたった小林誠治は、創立時をふりかえって次のように記している。

「当時田畑の真ん中にありましたが、将来的には新しい町造りが計画され、住宅団地も建設されつつありましたので、教会の地域社会への奉仕のいったんとして、また地域の方々の要望もありましたので幼稚園を設置する運びとなりました。（同上）」

当時の教会の記録にあたってみても、幼稚園の設置に関し、教会でその宣教的使命についての綿密な確認の作業が行われた様子はいかたがえないう。創立精神として記されているものについても、その具体的内容についてはまったく幼稚園の現場に委ねられているのであり、教会が積極的に関心をよせ、責任を負うものではなかった。教会にとっての幼稚園開設の意義は、新興住宅地への教会移転を契機として、ちょうど「ステートメント」第3項に列挙されているような理由、「幼児に神を知らせ…できれば彼らが信仰を継承するように」「地域住民への接触をはかり、地域伝道あるいは地域への奉仕に役立てようとする」「経済的理由」のどれもが、漠然と意識されていたにすぎなかったようにもうかがえる。

しかし、まさに「ステートメント」第3項にあるように、「神はこれらの施設を用い、人間的な創設の意図をこえた働きによって幼児を導き、助け育ててこられた」のであった。ひまわり幼稚園における「キリスト教精神にもとづく人格教育」の実際は、ひまわり幼稚園に以下のようないくつもの際立った特色をもたらした、現在にいたっている。

#### 保育内容の特色

前述のように、ひまわり幼稚園の保育内容について、当初から教会が積極的な関心をよせていた様子はいかたがえず、ほとんど現場の教師たちおよび牧師＝園長にその責任が負わされていたのであった。これら現場の人々の努力によって、以下にみるような保育の特色が形成され、現在にまで引き継がれてき

ている。

ひまわり幼稚園の保育の特色としては、まず第一に、幼児をひとりの人間として、その人格を重んじることがある。さまざまな場面で、幼児自身の主体性を重んじ、自発的な行動や自分の判断に基づく選択をできるだけ尊重して受入れていくのである。また、幼児ひとりひとり、あるいは幼児の集団としての自律性を育てるために、しつけを要する場面においても、教師は幼児本人と十分に話し合い、問いかけ、自己の省察と判断を促すような方法をとる。体罰はいうまでもないが、頭ごなしに「〇〇ちゃんが悪いんだから、謝りなさい」という指導方法はなるべく避け、「どうしたの、どうしたらいいの。」という問いかけを中心としていくのである。幼児の主体性と自発性を新調するこのような指導方法は、幼児集団の中にも相互の関わりを生み出すこととなり、年長児ともなれば、こどもどうしの些細な衝突や小さなケガなどは教師に頼るまでもなく自分たちで判断して処理していくことができるようになる。

また、ひまわり幼稚園においては、早くから心身の障害を持つこどもたちをも受け入れ、いわゆる統合保育を試みて来た。もちろん、障害児の療育に関して、幼稚園として各個のケースに対応できるだけの専門的スキルを備えているかといえば、それははなはだ不十分といわざるをえない。しかし、健常児・障害児という医療的診断をこえて、その子の人格を第一に受け止めていくことは、上述のようなこどもの人格を尊重する保育のありかたからすれば、むしろ当然のことであり、健常児と障害児の混在を自明のこととして受けとめることとなるであろう。

さらに、ひまわり幼稚園の保育においては、家庭にも保育への関わりを求めることが非常に多い。様々な行事への父母の参加を求めたり、幼児の心身の状態や、家庭での幼児の生活環境について教師と家庭の間で詳しい連絡がなされる場面が多い。これは、幼児を幼稚園生活においてだけ理解するのではなくて、その人格をトータルに理解するために必要なことと認識されている。このような幼稚園と家庭との関わりの中から、とくに母親たちの連帯が生まれ、核家族化の中で子育てに悩む母親を、経験ある母親が助ける場面もしばしば見られるようになっている。

### 「いやし」と保育

これらのひまわり幼稚園の保育の特色は、前述の「いやしのミツ ション」としてとらえることが可能であると思う。

今日の日本の社会について、管理社会という批判的指摘はすでに聞き慣れたものであるが、にもかかわらず社会の管理体制は強化の傾向にあり、なかんずく学校教育の場にあっては中等教育から初等教育にまで管理強化の波は及んできている。管理が、個性と人格を捨象するところに成り立つものであり、それゆえに個人の自由で健全な成長を疎外するものであるとすれば、人格の尊重とその成長を中心にするキリスト教保育のありかたは、今日の社会の管理強化の傾向のなかで、まさに「いやし」の働きを担うものに他ならない。

たとえば、統合保育に関していえば、社会において、規格化されず効率向上の妨げとなるとして切り捨てられる対象である障害児を、人格をもつひとりの人間として認め、健常児と共にあることを当然のこととしていくことは、障害児と共に幼稚園生活を送る健常児たちにとっても、非人格的な管理的発想からの解放をもたらし、健常児自身の人格の成長をも豊かに保障するものではないだろうか。

また、先に幼稚園と家庭との関わりが、家庭どうしの関わりを生み出していることにもふれたが、現代の社会の中で、共同体の支えを失い各個に孤立する家庭のありかたが一般化しつつある中で、若い世

代の親、とくに母親の孤立感・孤独感は心身を蝕むほどの深刻な問題であり、幼稚園を通じて共同体的な交わりによる支えを得られるとすれば、それはまさに「いやし」のわざに他ならないのである。

#### 4 おわりに

現在、ひまわり幼稚園は、旭川市内唯一のプロテスタントの教会幼稚園として、教団のみならず諸教派の教会員の家庭から、信仰の継承のための器として期待と支持を得ている。また、卒園生から豊岡教会の役員になる者がでたり、園児の母親で受洗に導かれるものも与えられるなど、その30年をこえる歴史のなかで、伝道的役割も十分に果たしてきた。

しかし、教会の成長と共に、教会が財政的に幼稚園に依存する部分もなくなり、かえって幼稚園との共存がある面では負担にもなってくると、幼稚園の存在に疑問を投げかける声も出てくるようになってきている。このようなときに、教会幼稚園の存在を、教会の宣教の使命の中に位置付けることは、大切なことであると思われる。

今日の状況の中で、教会幼稚園の果たすべき宣教の使命は、すでに述べたように、「いやしのミッション」としての働きにあるように思われる。そのことは、ひまわり幼稚園においては、これまで明確に意識されてはいなかったとしても、神は「人間的な創設の意図をこえた働きによって」、ひまわり幼稚園を用いて神の「いやしのミッション」をすすめて来ていたのであり、教会もそのような神の備きに既に関わってきたのであった。

今日ますます非人間的な管理の度を強めていくこの社会において、神の教会の「いやしのミッション」の働きの際は、増大していくことが予想される。そのような「いやしのミッション」の器として、教会幼稚園は、今後ますますその意義を増していくものと思われるのである。

#### <参考文献>

- 日本基督教団全国教会幼稚園連絡会編 『新キリスト教幼児教育の原理』 日本基督教団出版局 1979  
福島恒雄 『幼な児よ天に向かってはばたけーひまわり幼稚園教育実践記録20年の歩みー』  
ひまわり幼稚園 1979  
『キリスト教保育指針』第3版 キリスト教保育連盟 1990  
黒田成子『幼児教育を考える 現場の人のために』 日本基督教団出版局 1971  
神田健次他編『総説実践神学』 日本基督教団出版局 1989  
神田健次他編『総説実践神学Ⅱ』 日本基督教団出版局 1993